

8 2006
August

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.152

CONTENTS

- I 巻頭 2
- II 特集：学部長の声・
新入生の声 3
- III 留学体験記 9
- IV 弘前大学施設紹介
教育学部附属
国際音楽センター 11
- V 新任教員自己紹介 12
- VI 第1回
弘前大学「言語力」大賞
コンテスト 14
- VII けいじばんコーナー 22
- VIII 編集後記 23



制作 教育学部学生 小山 薫

特集 新学期
学部長の声・新入生の声

新入生の皆さん、入学以来早4ヶ月が過ぎました。大学の生活にも、弘前の街にも慣れ、順調な学生生活を送っていることでしょう。しかし、新入生に限らず本学の学生の皆さんは、弘前大学に入学して良かったと思っていますか。また、弘前大学で学んでいることに喜びを感じていますか。そして弘前大学で学んでいることに誇りを持っていると学外の人に語れますか。

確かに、中央から見れば地方の大学です。大学の規模も決して大きくはない。キャンパスは一寸狭いし、講義室も汚いところもあります。教員の数も少ないし予算も少ない。

しかし、皆さんそれが何だというのですか。本学には他大学にはないすばらしいものが沢山ある、それが私の誇りです。全国の国立大学長の会議で、地方の大学の学長が自ら発言することは極めて少ない。けれども私は本学の誇りを背にして発言しています。

弘前大学は、札幌と仙台の丁度中間の弘前市にある中規模総合大学です。人文学部、教育学部、医学部、理工学部、農学生命科学部の5学部から成り、学問のすべての領域の基礎をカバーしています。医学部保健学科は、全国最大規模で1学部相当の大きさです。さらに、これらのすべての学部に大学院が直結しています。弘前大学は完成度の高い大学です。

教養教育である21世紀教育のメニューを見て下さい。他大学の教員の方々もほめている内容です。これは、5学部のすべてが担当するから可能なのです。そして、教養と専門基礎重視の立場から全学一斉導入のコアカリキュラム。これを5学部もある中規模大学で全学一斉に導入している大学はどれほどありましょうか。

そして全国的にも、高い評価の与えられているクラス担任制。これは昭和31年(1956年)ごろ医学部が全国に先駆けて実施したとの新聞記録の残っている本学のオリジナルで、その後他大学のモデルになりました。

卒業生と言えば、北海道から北東北で活躍する小中高校の先生、北海道から東北地方、中部地方に至る僻地の医療の現

場で活躍している赤ヒゲ・ドクター。このように本学では地域で活躍する多数の人材を養成してきたことを誇りとしています。勿論官僚や政治家は少ないが、大企業等産業界の多数のリーダー達を輩出しています。この方々が、皆さんの就職を限りなく応援しています。



弘前大学長 遠藤 正彦

研究はと言えば、白淵勇教授の世界で初めての実験腫瘍として確立した白淵肉腫及び弘前肉腫、また、後に文化勲章を授賞した高橋信次教授による現在のMRI(磁気共鳴映像法)の原理となる回転横断撮影法を始め、多数の誇れる研究があります。現在、世界自然遺産白神を様々な研究の対象にしていること、また本学の発掘による亀ヶ岡文化の出土品の常設展示場・亀ヶ岡文化センターも本学の誇りです。

本学は、昭和38年以来連続43年間弘前市のねぶた祭に参加し、そのねぶた絵のすべてを附属図書館に保存してきました。その40年分の絵を撮影し「津軽の華」として一昨年弘前大学出版会設立記念として刊行し、ベストセラーとなりました。この弘前大学出版会は創立まだ3年目ですが、地方大学の出版会としては着実に出版を続けていることから、全国的に注目を集めています。

附属図書館は現在80万冊の蔵書を有しますが、より特徴的なのは、本学の前身旧制弘前高等学校卒業生である太宰治に関わる太宰治研究文庫、レオナルド・ダ・ヴィンチを始めとする医学古典叢書332冊より成る松本文庫、エジンバラ大学総長でピーターパンに代表される童話・戯曲等の作家ジェームス・M・マシューの我国最大のコレクション、ピーターパン・バリ文庫等は本学図書館の誇

りです。そのピーターパンの名を冠した農学生命科学部附属藤崎農場のピーターパン・チューリップ園は津軽地方最大のチューリップ園です。

学生諸君の課外活動も誇りです。弘前大学全学及び医学部山岳部とその両OB会は、昭和47年(1972年)から海外遠征登山を重ね、パキスタン・カラコルムのテラム・カンリ3峰(標高7382m)、ネパール・ヒマラヤのヒムルンヒマール(標高7126m)、更にアルタイ山脈全長330Kmの世界初縦走の他、新ルート開拓での6山の初登攀に成功しました。その記念碑が50周年記念会館前に立っています。

入学式・卒業式でおなじみの弘前大学フィルハーモニー管弦楽団は、ブルックナー、ブラームス等の難曲をもレパートリーとし、大学オーケストラとしては全国レベルと評価されています。

課外活動の運動部、文化系のサークルはそれぞれ地方大会、全国大会で優勝を始め上位入賞を果たしています。トリノ五輪には本学初のオリンピック選手も出ました。紙面の都合で一々あげられませんが、皆さんの方がこのことは良く承知しているでしょう。

皆さんの先輩の就職状況もすばらしい。昨年、国家公務員試験I種4名合格、そして司法試験合格者もでした。学生の就職活動は本学の誇りです。

本学の歴史もまた輝いています。本学は昭和24年旧制弘前高等学校、弘前医科大学・青森医学専門学校、そして青森県師範学校が合併して弘前大学となりました。その中で最も古い創立は教育学部の前身青森県師範学校の明治9年で、今年で実に満130年となります。本学の歴史はすいぶん古いもので、多くの人材を輩出し、多くの研究業績を世に出してきました。

今まで述べたことに、皆さんが誇りに思わないはずはありません。皆さんには、これらの誇りを胸に、弘前大学で学ぶことの喜びを感じ、各々自信と誇りをもって卒業まで努力して下さい。その時、弘前大学は皆さんの質の高さを社会に向かって保証します。その日を待っています。

弘大生必読。これが弘前大学の誇りです。



Ⅱ 特集 新学期：学部長の声・新入生の声



自分探し・
旅・散歩

人文学部長 石堂 哲也

島崎藤村の『夜明け前』は、木曾の馬籠に幕末から維新の激動を生きたある人物の一生を描いた大作ですが、そのなかにつぎのような言葉がでてきます。

「なんでも子供は寒くひも饑しく育てるものだって、昔からよくそう言いますよ。」（『夜明け前』第一部、下、6）

代々本陣をあずかる庄屋の家系ですから、むしろかなり豊かな一族であった。その人たちからこういう言葉が出てくる。大多数の人々が貧しく暮らしていたなかでこそ生きていた叡智と言えるで

しょう。

私達は今、ようやく手に入れた豊かな社会のなかで戸惑っています。豊かさはその使い道を知らないと、じつはかなり厄介な代物です。努力して到達すべき目標が見えにくくなるからです。

人間として最も成長する二〇歳前後の数年を勉学に費やすことができるのは、つい数十年前までは、ごく一部の階層の子弟にのみ許されたことで、考えてみると随分贅沢なことです。

かと言って自ら求めて「寒く饑しい」生活を組み立てることは凡人にはできません。せめて学生生活が本当に豊かなものとなるように願って、今思い当たることの一つ、二つを書いてみます。

折に触れて身の回りを点検し無駄なものを削り取るよう試みてください。まず、携帯電話をオフにして、自分の時間を

くりましょう。

と言っても、手ぶらで自分と向き合うことは困難です。勉強とは別に本を読む習慣を身に付けてください。そういう読書は結局自分との対話だからです。既に読書の習慣が身につけている人は、四年間の読書計画を立ててみてください。

アルバイトをするなら、そしてその給与を学費に当てなくてもよいならば、旅をしてください。短期間でもいいですから、一度日本の外にでてみることを勧めます。若者の行くべきは、くれぐれも、ディズニーランドではありません。

旅行をする余裕がなければ、散歩をしましょう。とりあえず、大学から歩いて30分程度で行ける3ヶ所をあげておきます。一木村産業研究所、偕行社、東照宮。これらがなぜ弘前にあるかを考えると、きっと見えてくるものがあると思います。見えてくる一この感覚が大切です。

失敗と反省を



人文学部 現代社会課程 薄井 智香

たくさんの目標を持ち、私が弘前大学に入学して三ヶ月が経ちました。長いようで短かった三ヶ月ですが、高校までと

は違う生活のせいで多くの戸惑いや苦勞があり、とても濃く短く感じました。

親元から離れて生活をする、成長していく自分というのを感じる事が出来ます。最初は身の回りのことを全て自分でしなければならぬのは大変でした。しかし、今までとは違う視点を持つことが出来るようになったり、全国から集まった友達や年の離れた人達と話す機会があったりと、良い刺激をたくさん受けています。しかし、とても充実した時間を過ごしていますが、私は自分の立てた

目標を何一つ達成していないのも事実です。

「たくさん失敗をしたい」というのが今の私の目標です。失敗は人を大きく成長させるものだと思います。一度した失敗を繰り返さないようにすれば、大事な場面で失敗することはありません。もちろん反省は大切ですが、痛い思いをすることはもっと大切なことだと思います。失敗がある程度許される期間が四年間もあるのだから、たくさんの失敗と反省を繰り返して、大人になりたいと思います。

幸せの溜息を ひとつ



人文学部 人間文化課程 富塚 博子

朝、目が覚めてまず思うことは「私なにやってるんだろう？」ということ。「ああ、弘大生になったのか」ということ。こんな寝ぼけた思考に大きな意味なんて

あるようには思えないけれど、弘大に入学してまもなく前期が終わろうとしている今日この頃の素直な感想。

私が大学生になってから最も気に入っていることは「日々流されないようにすること」です。大学生活というのはあっという間に終わってしまうというのはよく言われることですが、その短い期間を納得のいくまで有意義に過ごさることは難しいことです。実際私も家事や課題に追われて気がつけば日付が変わっていきびっくりすることがあります。まだやりたいことの半分も終わっていないのに

……。

高校の時（特に受験）のような束縛もなく、さらに自分にとって興味のあることを追求できる今の環境をととても幸福に思っています。勿論、慣れないレポート作成など大変なこともあります。やらなければならないこともやりたいことも、どちらも手を抜くことなく完遂していけたらと思います。

図書館の机に向かって疲労と幸せとが入り混じったような溜息をつきながら、一分一秒にしがみついている日常を生きています。そんな日々が私の大学生活です。



医学部長 佐藤 敬

新入生への
すすめ

早いもので、4月に入学されてから半年も過ぎようとしています。一年生の皆さんは新しい生活にもう慣れたことと思います。特に故郷を離れて入学された学生さんは、たぶん弘前の街に対して新鮮な印象を持ったのではないのでしょうか。毎年この時期になると、私自身が38年前に北海道から入学して来た日のことを改めて思い出しています。

私には、新入生へのすすめというよりは、もっと強いお願いとも言うべきものがあります。この数ヶ月の間に、大学における勉強がこれまでの受験勉強に比

べると楽だと感じるようになった人も少なくないと思いますが、どうでしょうか？ 本当はそうではないのです。これまでの勉強は、日々の授業の中である程度為すべきことが示されて来ました。よく言われることですが、大学では、自分の勉強方法を見付けなければなりません。そのことをまだ達成していない人は必ず今年中になにかを見付けることを目標にして頂きたいと思います。

具体的には、どんな方法が考えられるのでしょうか。これに関して自分自身も多くの経験をして来た訳ではないので、私からの提案は一つしかありません。やはり、自分が興味を持てる教科書を見付けて、自ら勉強することではないのでしょうか？ もちろん、講義で使用している教科書でもなんでもいいのです。例えば医学部の学生であれば、1年生から「基礎人体科学演習」の授業で使用している“Human Biology”は素晴らしい教科書です。これは授業中に最初から最後まで系統的に読み進むということはしていま

せんが、そのこととは関係なく、自分のペースで読んでいくことです。幸い、この教科書は生物学の基礎から書き起こしているため、生物を選択していない学生にも適しており、高等学校で既に生物の知識を十分身に付けている人は、その部分を省略して人体に関する踏み込んだ解説や病気の説明から入ってもいいのです。既に翻訳も出版されていますが、自分なりの翻訳を目指してもいいのではないのでしょうか。この他にも、いろいろな可能性があると思います。とにかく、1年生のうちに自分なりに勉強のスタイルを身に付けなければ、大学における勉強は、単位認定・進級のための試験勉強と、就職活動や医学部では国家試験の受験勉強に終始してしまう可能性もあります。もちろん私は、それらの面で皆さんが成功を収めることを切に願っています。しかし、大学は就職や資格取得のための予備校ではありません。そうならないために、この1年間の大切さを強く認識して欲しいと希望しています。

弘前大学に
入学して



医学部 医学科 新井 徹

与えられたテーマが、「弘前大学に入学して」という曖昧なものだったので、ここでは、入学してから現在までの、弘前大学でのサークル活動についての感想を書かせてもらおうと思います。

4月に入学して、行事等がひと段落すると、1年生はかなり時間に余裕が持てるようになりました。本格的な授業はまだ始まらないし、サークルにもまだ所属していない、かといって、遊ぶ場所もまだ詳しくない、そんなこんなで、かなり時間をもてあましていました。しかし、そんな感慨も、サークル活動に所属するようになってどこかに消えてしまいました。私が現在所属しているサークルは、弘前大学フィルハーモニー管弦楽団ですが、このサークルがまた忙しいのなんの。5月にコンサートがあるというので、入

団してすぐに楽譜を渡され、ほぼ毎日、学生会館の練習室に、会館が閉まるまで詰めることになりました。今考えると、4月当初の時間をもてあましていたのが嘘のようです。それでも、私は、弘大フィルに所属してよかったと思います。練習はキツイですが、先輩方はみんな真剣に音楽に取り組んでいるすばらしい方々ですし、同じ1年の学部外の友人も多くできました。

次のコンサートは、自分の納得のいく演奏ができるようにがんばりたいと思います。

弘前大学に
入学して

医学部 医学科 後藤 真一

私が今年の4月に弘前大学医学部医学科に入学して以来、早くも3ヶ月が過ぎようとしています。私自身弘前高校出身であるので、特に弘前大学に入学して大

きく生活が変化したということはないのですが数少ない変化といえば友人や先輩の変化です。実際私は最初言葉というものにとっても苦労しました。とにかく津軽弁が通じないのです。そのためもあってか、とにかく最初のうちは高校時代の友人とばかりつるんでいて新しい友人があまりできませんでした。しかし入学してから数日後に行われた医学科生対象の合宿セミナーにおいて様々なようやく自分たちにも新しく友人ができ始めてきて、今では最初気にしていた津軽弁も理解し

つつあるようで、何とか私の言っていることを聞き取ってもらえるようになっていきます。更に私は医学部バスケットボール部に所属しており、この部活内でたくさん先輩たちと仲良くなることができました。先輩たちからは大学でのアドバイスなどを教えてもらったり、ご飯をおごってもらったりと本当に感謝することばかりです。医学科生は6年間という長い間大学で学ばなくてはなりません、よい医師になれるよう、これからがんばっていきたいと思います。



充実した
学生生活を

医学部 保健学科長 對馬 均

21世紀とともにスタートした医学部保健学科も、今春、第2期卒業生218名を送り出し、第6期生203人、3年次編入生22人、大学院修士課程院生26人を新たに迎えることができました。目下、平成19年度からの博士課程設置に向け、鋭意準備を進めているところです。

保健学科の特徴として、「医療専門職になりたい」というはっきりとした目的意識を持って入学してくる学生が多いことや、1年前期から専門基礎科目や導入科目が開始される楔形のカリキュラムが編成されていることなどがあげられます。保健学科には5つの専攻がありますが、

いずれの専攻の授業科目も、各医療専門職の国家試験受験に向け、教育内容と到達レベルが国から指定されています。したがって、保健学科の授業時間割は他学部比べてかなり忙しいことも事実ですが、一昨行われたカリキュラム改正により、開設時に比べるとかなり時間的なゆとりができました。忙しさの中から、時間の使い方を学ぶことも必要です。せっかく生まれたこのゆりの時間をぜひ活かして欲しいものだと思っています。

四月に入学した保健学科の新入生も、保健学科での大学生活の流れにも大分慣れてきたことでしょう。目標として掲げた医療専門職を目指して勉学に励むことはもちろんですが、部活動など、総合大学ならではの課外活動を通して他学部の学生と交流し、さまざまな価値観に触れ、人間としての厚みをつけて欲しいと思います。また、全国でも最大規模の“5専攻からなる保健学科”というメリットを活かして、職種は異なるとはいえ、同じ“医療専門職”を目指す他専攻の学生との

協働活動にも積極的に参加してください。間違いなく卒業後の仕事に役立つことでしょう。

文京キャンパスと本町キャンパス間の移動が大変だとは思いますが、便利さの追求だけが文化ではないはずですから、これを逆にとってプラスに変えるという発想も欲しいところです。困難に直面したとき人間の真価が問われることとなりますが、そのとき頼りになるのはそれまで培われた知識と経験に他なりません。自信を持つことも必要ですが、自信は努力の積み重ねから得られるものだと思います。畑村洋太郎氏の提唱する「失敗学」という発想にみるように、失敗を恐れず失敗から学ぶことも必要でしょう。

さて、今は夏休みを目前に、期末試験の真ただ中といったところと思われますが、試験も長期休暇も学生ならではの特権です。苦あれば楽しみもまた格別なのではないでしょうか。後期からの授業に備え、充実した夏休みを過ごしてください。

再び弘前へ



医学系研究科 田中 謙次

もう二度と北の大地“弘前”に住むことはないだろうと思っていました。しかし、人生というものは何が起るかわかりません。現に、私はこの“弘前”に住んでいるのですから。私は世の中に起こりうることは必然だと考えます。偶然に

起こったように見えても、それは必然であると考えたほうが運命的な気がするからです。

弘前大学の保健学科を卒業して、1年間他大学の大学院に在籍しましたが、大きな違いを感じたのは、専攻間での交流が少ないのではないかと、ということです。もちろん、サークルや部活のように限局して考えれば存在しますが、学科全体で考えた場合にはあまり見られないように感じます。廊下のどこを見てもいつも同じ顔ぶれで集まっている。極端に言えば、入学してから卒業するまで専攻内での交流しかないわけです。各専攻が協力し合えるような話し合いの場を設ける、共同で取り組めるような課題を与えて交流の輪を広げてやる、といった試みもあっていいのではないかと思います。

もちろん良い部分もあります。学生と

教師が保健学科のことを考えて話し合う“FDフォーラム”は非常に評価できます。私が弘大に戻ってきて、学部に入学生したときに比べ良い環境にあると思うのは、この取り組みの成果が表れているからだと思います。どちらかという、学生の我が儘的な意見が多い気もしますが、思ったことを言える機会に言うということは大事なことでこれからも続けていくべきだと思います。

弘大に帰ってきたことが必然であるならば、大学院を卒業するまでに何か一つでもいいから、この保健学科をよりよい環境に出来るように心掛けて前に進んでいきたいと思っています。また同様に、今年入学した学生達も、自分たちが心から弘大に来てよかったと思えるように、何事にもチャレンジして行って欲しいと思います。

目標のために



医学部 保健学科 放射線技術学専攻3年

熊谷 大樹

私は今年に編入学で弘前大学保健学科放射線技術学専攻に入学してまいりました。以前までは北海道の学校に通ってお

り、放射線技師の専門的な知識や技術を学んできました。私がなぜ就職の道ではなく編入学という道を選択したかということ、とても単純な理由であります。もっと勉強がしたかった・大学生活というものを経験したかったということでした。私は目標としている放射線技師像があり、患者さんが安心して検査を受けられるだけの専門的知識や技術は当然のこと、医療従事者として患者の身になって接することのできる技師というもので、そのために大学でもう一度、深く専門分

野の勉強を行い、また多くの人と関わり多くの経験を積んでいく中で自分自身を人間として成長させていきたいと考えています。この道は思っている以上に簡単なものではありませんが、常に目標というものを見失わぬように日々の努力を惜しまず邁進していきたいと思ひますし、少しずつでも目標に近づければと思ひます。放射線技師として自分に自信が持てるように、そして目標のために。



基礎学力充実が
あなたの未来を築く

理工学部長 南條 宏肇

新入生の皆さん入学おめでとうございます。皆さんはそれぞれ夢と希望をもって大学に入学されたことと思います。その夢と希望をかなえるために、これからしっかり勉学して、社会に羽ばたいていけるよう期待しています。一昔前までは「いい会社に入れば、年功序列で一生安泰」という就職状況で、学生が企業を選ぶ時代でしたが、今は競争化社会で、企業が学生を選ぶ時代となっています。一流企業といえども今は潰れますし、たとえ潰れなくても力がないとリストラされる。好むと好まざるに関わらず、競争によって生き残らなくてはいけない時代

になっています。

皆さんが高校まで培ってきた能力は主に「到達目標達成型」能力というもので「答えある問題の答えを早く出す」という能力です。しかしこの競争化社会で生き残っていくには、答えない問題を解く「課題探求型」の能力が必要です。新しいものを生み出す課題探求型能力が、到達目標達成型能力とどう違うのかについて、アインシュタインの3つのエピソードを紹介しましょう。

1. アインシュタインは大学院の入試に失敗している。すなわち「入試では彼の能力が判定できなかった。」ということになる。
2. 担任の先生から「君は生涯決してひとかどの人物にはなるまい」と言われていた。このことに関して妹は「教師の望む即答がなかなか返ってこなかったからである」と述懐している。
3. ある教授と議論していて、ひとつの公式が必要になった。すぐには出ないので次の日までの宿題となった。次の日アインシュタインは目を真っ赤にしてきた。公式を徹夜で導き出したのだが、別

の教授は図書館で公式を写してきた。

このような新しいものを生み出す課題探求型能力は、しっかりとした基礎学力があって初めて身に付きます。この力を身に付けることを主眼にして、理工学部では18年度、学科再編を行いました。専門基礎教育を充実させるための教育プログラムとして

- 専門基礎を2年間から3年間へ
- 学科必修科目増大
- 演習科目の増大とティーチングアシスタントの増強
- 興味を持たせる科目の導入
- 具体的な学科の理念および、明確な教育目標

などを盛り込んでいます。

このようなカリキュラムは、全国でも数少ない理工学部だからこそ可能になるものと自負しています。皆さんが自分のやりたいことを実現しようとするのならば、基礎学力に裏打ちされた問題解決能力を身につけることが一番の早道です。そのために最適な環境で基礎学力をしっかり身につけて、世の中に羽ばたいていくことを期待しています。

大学に入学して



理工学部 物理科学科 秋山 隼

弘前大学に入学して約4ヶ月がたち、大学での新しい生活にも慣れ、新しい友達と一緒に充実した日々を送っています。

す。私は中学の頃から理科がとても好きでした。そして、高校2年生になってから理科の中でも特に物理の授業が楽しくて、物理が大好きになりました。大学進学を考えるようになってからは、以前から興味があった建築系に進むか、大好きな物理系に進むかすごく悩みました。考え抜いた末、小学校・中学校と弘大附属にいて、とても身近だった弘前大学の理工学部物理科学科に決めました。

合格発表から入学までの間、本当に物理科学科でよかったのかと悩み、不安に

思うこともありましたが、しかし、今では授業などで先輩方の研究成果や卒業論文に触れるたびに驚き、興味が沸きます。そして、物理科に入って本当に良かったという思いと共に、これから4年間で自分自身がどのように変われるか楽しみでしかたありません。

私は将来、物理の先生になりたいと考えています。教員になるのは決して簡単なことではないですが、物理の楽しさをたくさん伝えられるような先生になりたいです。

ニューライフ



理工学部 物理科学科 木村 達也

僕が弘前大学の学生になって早くも三ヶ月が経ちました。振り返ってみると、入学前は、楽しく充実したキャンパスライフを送りたい！ などといった希望と

共に、やはり、大学での授業についていけるかなど、不安な気持ちもありました。そして、実際に大学生活を送ってみると新しい友達もたくさんできて、大学へ行くのが楽しみになっている自分がいました。

授業面では、高校ではどちらかという決められた授業でしたが、大学では自分の学びたい講義を受けることができます。なので、高校のときよりも自分から積極的に授業に取り組んでいけると思っています。自分も今では積極的に授業に取り組んでいます。それから、小学校から続

けているバスケットを、僕は今でもサークルで続けています。サークルにはたくさん種類があり、もっと余裕ができればもう一つくらい入ろうと思っています。食堂のメニューも新しいものがよく出ていて飽きることはありません。さらにレストランもあります。

まだ大学生活は始まったばかりです。これから何度も障害にぶち当たると思いますが、しかし、それを全力で乗り越えていき、後悔のないような大学生活を送りたいです。必ず何事にもチャレンジしていきます。

Ⅲ 留学体験記



2004年度 韓国の京畿大学



京畿大学の語学堂。クラスあたりの人数はとてもなく、中国・モンゴル・ロシア・カザフスタンの学生が多かった。日本人が一番多い時で4人しかいなかった。

農学生命科学部応用生命工学科 塚崎 翔太

僕は2004年度に韓国の京畿大学へ、2005年度に中国の哈爾濱師範大学に留学していました。2年共に語学留学で、外国人ばかりの集まる語学堂で現地の言葉を学んでいました。弘大での所属である応用生命工学科の内容とは全く関係の無いことをずっと勉強していたわけですがそこから得られたものはとても多く、今までの人生の中で一番自分が成長したと思える2年間でした。

留学することの利点はなんといってもやろうと思えば一日中外国語に触れていられることと、日本でのすべての煩雑から開放されて語学に集中できることだと思います。自分ひとりで新しい環境に飛び込んでいくので単位のことと他の悩みのこともすべて忘れて語学に集中することができます。もちろん

現地入りしてから考えなくてはいけないことはどんどん出てくるのですが、それはもう外国での経験なのであまり苦にはなりません。・・・と今となっては思うのですが、実は留学当時は色々悩んでいた気もします。

留学中は予想外の出来事がたくさん起こり何度絶望したかわかりません。パスポートを無くして中国語が話せないままひとりで6時間汽車に乗り日本領事館を探しに行ったこと、竹島の日制定のせいで毎日韓国の学生に責められたこと、ルームメイトとけんかしたこと、激しい食中毒で立てなくなったこと、バスの運転手に荷物すべて持ち去られそうになったこと、夜中に立ち席で11時間



新羅時代の都・慶州にある仏国寺。過去に文祿の役で日本人に破壊されている。



韓国の大統領官邸、青瓦台。周囲はかなり厳重な警備で、何度も私服警官に身分証の提示を求められた。



ソウル郊外の犬肉市場。ショッキングな光景も見受けられたが肉を食すということは、こういうこと。同じことが日本でも行われているのだから一度見ておくべきだと思う。



寄宿舎での食事の様子。韓国とロシアの学生と3人で暮らしていた。後にこのダンボール箱は廃棄処分となり、貧乏ドラマのようにみかん箱を食卓として使うことになった。



ライトアップされた清溪川。これは近年工事によって復元された川で、ソウルの観光名所となっている。



2005年度 中国の哈爾濱師範大学



汽車に揺られたこと、すべてかなりの修羅場でしたがやはり今となってはそれらひとつひとつが大切な思い出です。こういう経験もまた自分を大きく成長させてくれたものと思っています。

留学は帰国後の暮らしにも大きな影響を及ぼしました。現地にいる間は1年という限られた時間の中で多くのことを学ばなくてははいけないうので常に焦燥感が付きまといます。なので、否が応でも頑張っ勉強します。思えばそれまでの自分は特に何も考えずになんとなく生きていた気がします。それがこうして勉強することで「頑張る」ということを覚えました。語学と生命工学、分野は違えど留学中に得た心構えが今も生きています。ただ最近では留学していたという美しい過去にすがって生きている自分がいることに気付かされました。もうすぐ研究室も決まるのでこれからは過去にとらわれず、前を見て生きていこうと思います。

2年間で経験した事、得たもの、そのすべてをここで語ることはできませんが色々なことがありました。留学して本当に良かったと思っています。



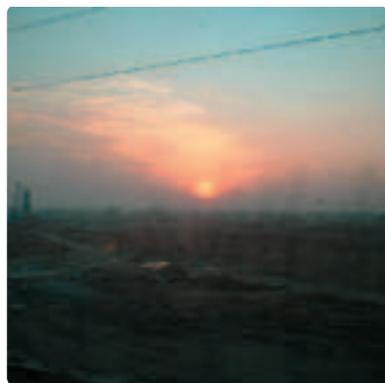
夏になると多くのおやじ達が上半身裸で活動する。奥のテーブルに見える緑の瓶は、ハルビンビール。



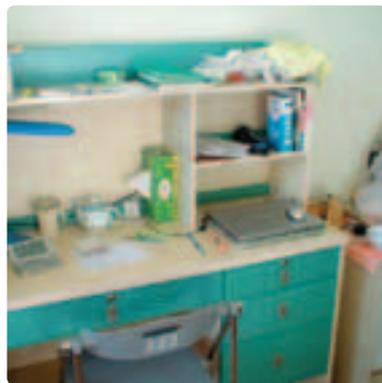
中国の大学生は全員、入学時に1ヶ月の軍事訓練を受ける。



大同にある懸空寺。こんな崖にどうやって建てたのか不思議だった。そしてとても綺麗だった・・・ 中国にはこんなすごい名所が各地にたくさんある。



留学中最後の、瀋陽に向かう汽車からの光景。あの時の心境を考えると涙が出そうになる。



寄宿舎の自室。現地の学生の寄宿舎と違ってとても綺麗だった。自分たちばかりこんな良い所に暮らしててなんだが申し訳なかった。



中国の料理はどれも強烈においしかった。香菜という薬味や花椒、孜然といった香辛料がよく効いていた。



浅野 清
(代表、教育学部教授)

今田 匡彦
(副代表、教育学部助教授)

和田 美亀雄
(教育学部教授)

杉原 かおり
(教育学部助教授)

教育学部附属国際音楽センター

理性の時代の<オンガク>

理性はことばでできています。

精神とか、思考などと呼ばれる以前の、混沌とした人間の意識、そしてその意識を取り巻いていた空間とのあいだに、一筋の流れを探し出し、合理的に整理整頓するために、ことばは最も効率の良い道具だったのでしょう。近代科学は、ことばの合理性、つまり、知性なしには成立しないのです。

この知性により、さまざまな謎が解消され、病気が治ったり、遠いところまで歩かないでいけたり、冬なのに凍えなかったり、それどころか泳げたり、わざわざショッピング・モールへ足を運ばなくても買い物が出来たり、と、良いこと尽くし、のようではありません。

世の中便利になれば、結局、暇ができる、で、衣食足りたところで、音楽でも、ということなのでしょう。しかし、そのときにはもう遅い、合理性のみに血道を注いできた、そのヒトの身体には、もう何も響鳴しない、感性の窓は、そう簡単には開かないのです。

理性はことばでできていますが、ことばによって命名される以前の<理性>は、もう一本の別の道に向けて、開かれていました。

初期の芸術を語るとき、必ず例示されるのが、ラスコー、アルタミラ、ニオー、ラ・パシエガなどの洞窟壁画です。壁画は、<モノ>、として視覚的に残っていますが、洞窟の中では、なにやら怪しげな儀式が執り行われていたであろうことは、想像に難くないし、内部の残響時間の長さを考えれば、当然、楽器も演奏され、うたも歌われていたに違いない、感性の窓は、つまり、ことばよりも先に開かれていて、恐らくは、ことばを遥かに超越していた、かもしれません。<オンガク>は、最初の人間とともに、既に在った、というわけです。ヒトには、生得的に<オンガク>が在る、と、ただそれだけのことです。あるべきヒトの総体を、ことばで明確化するのには、簡単なことではありません。しかし、流動的な妄想や無意識に形式をあてがい、様式を創造する行為は、ヒトがヒトである為の、極めて重要な特徴であることだけは確かでしょう。

ここで思い出されるのは、ルネサンスの<普遍的人間 (uomo universale)>という概念です。この<universale>が、大学を示すことは云うまでもありません。普遍的な人間を探究する大学に於いて、ですから、音楽が果たす役割はとて大きいのです。

科学技術と資本主義を優先させる教育は、なにも日本の大学だけにみられる特徴ではありませんが、成熟した文化は、常にバランスを取ろうと努力します。残念なことに、<国際音楽センター>なるものを持つ総合大学は、日本には殆どありません。故に、弘前大学は、実は非常に健康な大学である、ということです。

このセンターが設立される以前から、教育学部音楽教育講座では、海外からの多くの音楽家、研究者との交流を持ち、小規模なシンポジウムやコンサートを行ってきました。それらの集大成として、2004年には「弘前大学国際音楽フェスティバル」という、国立大学としてはあまり例のない、ユニークなイベントを開催するに至りました。それらの活動が、昨年、教育学部附属国際音楽センターとして結実したわけです。

国際音楽センターでは、既に、オーストリア共和国外務省協賛による「シンポジウムとコンサート」(2005年10月)、センター所属教員による「Mostly Concert」シリーズ(2005年11月、12月)、ニュージーランドと日本の作曲家の作品によるヴァイオリン&ピアノのデュオ・リサイタル(2006年2月)などを開催してきました。また、本年11月には、カナダを代表する作曲家R.マリー・シェーファーを招いての国際学会、「WFAE世界音響生態学フォーラム」(日本サウンドスケープ協会国際委員会との共催)を開催する予定です。尚、センターの詳細については、以下のWebsiteを参照下さい。
<http://siva.cc.hirosaki-u.ac.jp/himc/> (今田匡彦、教育学部助教授)





V 新任教員自己紹介

日野 辰哉

人文学部 公共政策講座 講師

初めまして。この4月から行政法を担当する事になりました日野です。実は、弘前に着いて早々に美容院に行ったところ、店員から、弘前の人々が暖くなる6月頃以降、特に祭りの始まる時期になるとにわか活動的になるという話を聞き、そんな動物じみた話など……と思っていました。ですが、寒い4月も終わり天気の良い日が続く6月にもなると、何となく街全体が生き生きしてくる様子を目にして、あの話も大げさな話ではなく、東京に比べて遥かに自然の循環を意識する土地ならではの話なのだと感じています。〔7月記〕



長谷河 亜希子

人文学部 公共政策講座 講師

4月に本学人文学部に赴任しました。商法を担当しております。ライブドアや村上ファンド問題に見られるように、メディアでよく取り上げられる領域ですが、法改正が多く、資格試験を目指す学生にとっては悩みの種かもしれません。主たる研究領域は、コンビニに代表されるフランチャイズ・システムの法規制です。教育と研究を両輪として頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



飯 考行

人文学部 公共政策講座 講師

この4月に着任し、裁判法を担当させていただいております。訴訟法学とともに、地域の裁判や司法のあり方にも関心を持っています。今年度の裁判法ゼミでは、まず手始めに『わんどの法律家―津軽の裁判所利用ガイド』の作成に向けて、学生とともに近隣の裁判所や法律事務所などへお話を聞きに回る予定です。学生、自身ならびに地域に資する研究ができればと考えています。ご指導、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



渡 辺 麻里子

人文学部 コミュニケーション講座 講師

日本古典文学を担当しています。歴史があり、豊かな自然に恵まれた弘前に来ることが出来て、大変嬉しく思っております。弘前の桜には感激いたしました。今は「ねぶた」を楽しみにしています。私の研究は、現代に遺された昔の本を調査して、中世や近世に生きた人々の思いや考えを明らかにすることです。弘前を拠点に、北東北の古典世界を探究していきたいと思っております。どうぞよろしく御指導のほどお願いいたします。



石 川 善 郎

教育学部 美術教育講座 助教授

昭和30年6月7日生、現在51歳、妻一人、国策に反して子供なし。東京生まれの東京育ち。青森（弘前）に赴任して18年目。当初は県立工業試験場勤務、後に名称が弘前地域技術研究所となる。平成18年度4月より弘前大学に移る。専門は工業デザイン及び工芸デザインで、得意分野はコンピューターグラフィックスと木工加工。各種材料を用いた立体デザイン作成。趣味は読書、映画鑑賞、音楽鑑賞、自転車、ボーリング等々々々々。



植 田 勇 人

教育学部 理科教育講座 助教授

山を歩き回って岩石を採取し、プレートの沈み込みによって深海底が山脈になるまでのしくみを研究しています。地学を通じて学生達が自然により親しみをもてるよう、授業・実習や研究指導に取り組みたいと思います。また、自然を理解することが自分や家族友人の身を守るにつながるということも伝えていきたいです。青森県に住むのは初めてですが、4月以来、学生達と調査や巡検に出かけながら山菜等の山の幸を楽しんでいます。





西澤 道知 教育学部 数学教育講座 助教授

今年度よりお世話になります西澤道知です。よろしくお願いたします。関東の出身で初めて北国で暮らすこととなり、赴任当初は、なかなか暖かにならない気候に心細い思いをしておりましたが、爽やかな初夏の陽射しの中、典雅な街並を歩けるようになったこの頃では、すっかりこちらの生活を楽しんでおります。専門は代数学です。学生の皆さんが、もの見方、考え方を学んでゆく際に、少しでもお役に立てればと思っております。



櫻田 安志 教育学部 技術教育講座 助教授

1967年に山梨県で生まれ、山梨大学工学部を卒業しました。その後、北大大学院工学研究科博士後期課程を修了し、千葉大学助手、釧路高専助教授を経て、2006年4月に弘前大学に着任しました。専門は工学教育、光計測で、最近では色彩に関して興味を持っています。弘前に来てから、文化の違いを感じる事が多く、その中で自分がどのように変わっていかのかをすごく楽しみにしています。どうぞよろしくお願いたします。



伊藤 巧一 医学部保健学科 検査技術科学専攻 助教授

今年4月に本学に赴任しました。専門は免疫学です。学生の皆さんに少しでも免疫学に興味をもってもらえるような斬新かつ魅力ある授業・研究をここ弘前大学で展開していければと思っております。研究テーマは免疫学的観点から臍帯血幹細胞のもつ潜在力を探ることで、仕事だけでなく学内イベントにも積極的に参加してできるだけ早く弘前大学に溶け込めるよう努めますのでどうぞよろしくお願致します。



渡辺 季夫 理工学部 物理科学科 教授

1956年、福島県生まれ。東京工業大学理学部物理学科を卒業し、同大学大学院物理学専攻修士課程を修了後、日本電信電話公社（現NTT）に入社。主に、高温超伝導材料の単結晶育成とその物性研究に従事してきました。今後は、取り扱う材料の幅を広げながら、「ものづくり」の楽しさや大切さを伝える教育にも取り組んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願致します。



松崎 正敏 理学部生命科学部 発生生理科学科 助教授

千葉の外房で生まれ育って、学生の6年間を弘前で過ごしました。農水省に就職して、つくばで半年、熊本で17年弱、家畜の成長とホルモンの働きや牛肉・エサ関係の試験研究業務に携わってきました。“動物はどんなふう成長してゆけばよいのか”をテーマに家畜の生産性や健康と関連づけて研究してゆきたいと思っています。趣味の乗馬を再開して筋肉痛で体中ガクガクしていますが、新天地での刺激的な毎日にワクワクしています。



大河 浩 理学部生命科学部 発生生理科学科 助教授

愛知県生まれ。名古屋大学大学院生命農学研究科生化学制御専攻博士（後期）課程修了後、日本学術振興会特別研究員、Washington Univ.博士研究員、農業生物資源研究所特別研究員を経た後に、今年6月より、ここ弘前大学に着任いたしました。専門は、植物分子生理学で、光合成及び炭素代謝に関する研究をしています。自然豊かな新天地弘前で、教育・研究に励み、研究の枠を広げていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。





VI 第1回弘前大学「言語力」大賞コンテスト

部門Ⅰ 文章表現のみによる部門

『言語力』とは、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含めています。

弘前大学附属図書館は、学生の皆さんに『言語力』を養ってもらおうと、平成17年度より「言語力」大賞コンテストを実施しています。第1回コンテストの受賞作品から部門Ⅰ「文章表現のみによる部門」の大賞・優秀賞を掲載します。



◆大賞◆

ゴドフリー・デリックの憂鬱

さいとうだいすけ
斉藤大輔

人文学部
社会システム課程 4年

闇の中に、二つの影がぼんやりと浮かび上がっていた。

僅かばかりの月明かりが差し込むその部屋は三方に分厚いコンクリートの壁が聳え立っていて、残るもう一方には厳つい鉄格子が嵌められている。部屋とは名ばかりのその灰色の空間は、檻とでもいうべき場所であった。何せ、何もないのである。ベッドも無ければ、椅子も、机も無い。光源と呼べるものは先ほどから仄かに差し込んでいる月明かりだけであるし、時の刻みを知るための時計もない。その檻の中で、影は時折全身をゆすりながら対峙するように地べたに座っている。

一方が、深呼吸のようなため息を漏らしながら、口を開いた。腹に響く低い声で、唸るように呟く。

「全くもって、何から何までが滑稽だ。酷刑と言ってもいいかもしれないな。朝起きると飯が用意されている。食べ終わると、自分ですら何をしているのかわからないような仕事をさせられる。気付けば夕食の時間だ。そしていつものように一日を終える・・・ただ生きているだけで、死を待つ生活というのはこんなにも辛いことなのか」

哲学者のような言葉は、溶けるように灰色の小部屋に反響し、消えた。

「デリックの旦那、あんたは何事も難しく考えすぎる傾向があるな」

もう一方の影が、あくび混じりにそう言うてくる。デリックよりも幾分か若い彼は、爽やかというよりも厭らしさを含んだ笑顔を見せ、鼻の下の髭を撫ぜた。

「君はもう少し難しく考える訓練をしたほうがいいな、ジャック・ケッチ」

ケッチと呼ばれた彼は、にやにや笑いはそのままに、小首を傾げて尋ねる。

「前から思っていたんだが、そのジャック・ケッチというのは何なんだ？ それにあんたは自分のことをゴドフリー・デリックと呼ばせる。それは一体なんのおまじないだい？」

「名前だよ」

「名前だって?!」

ジャック・ケッチはわざと大げさに驚くそぶりを見せ、やれやれ、といった様子で首を振った。

「デリックの旦那、あんたは全く大した奴だよ。ここでは名前を気にする奴なんて誰もいないんだぜ」

ケッチの言うように、彼らの名前はここでは意味を成さない。そもそも、彼らの本当の名前は、彼ら自身わからないのである。生まれたときから彼を名前と呼ぶものはいなかった。『あれ』『あいつ』、そういった単語が、彼らの名前代わりだった。

だからゴドフリー・デリックは、自分で自分に名前をつけることにしたのである。彼と同室であるジャック・ケッチにも、名前をつけた。それは自らの境遇に対するささやかな反抗であった。

「それはこの小部屋の外に行く人たちの都合だ。檻の外に行く、監視者たちのな。少なくとも、私と君には重大な問題だと思うがね。私は今、ここに生きています。例えそれが生きながらに死んでいるような生活であったとしても、私は確かに生きています。そんな自分が番号や代名詞で呼ばれるのを、私は許せない」

「・・・難儀な性格してるよな、あんたも」

灰色の小部屋に、白く優しい光が筋となって差し込んでくる。雲から顔を覗かせた月の光が格子の影を伸ばし、



やがて二つの影を照らした。双方とも、人間とは思えない凶悪な顔つきだ。顔中が髪の毛とも髭ともつかない毛で覆われている。その一因が、髭剃りも支給されず、散髪の手も与えられてはいない彼らの生活にあるのは言うまでもない。

誰のものともわからぬ遠吠えが、彼らの耳に届いた。嘆きのもでもあり、彼らへの嘲りのようでもある、そんな声だった。

「で、だ。今の生活に多大な不満を抱えていらっしゃるゴドフリー・デリック氏は、どのようなお考えをお持ちなんだい？」

茶化すような口調のケッチの質問に、デリックは少しだけ俯き、ゆっくりと語り始めた。

「私は、いや、私たちはね、自由というものを知らないんだよ、ケッチ君。私たちは生まれたときからこの檻の中にいるんだ。ここにいる誰もがその事実気付くことはほとんど無い。私だってそうだったはずなんだ。まあ、最初は檻という概念も知らなかったのだから仕方が無いことなのだがな。しかし、私は知ってしまった。檻の前に行く彼らの話に注意深く耳を傾けているうちに、私たちが生きるこの世界はもっと大きなものであるということを知った」

デリックの口調は、真剣そのものだった。伏せられた彼の鋭い両眼の奥には、決意の炎が静かに、しかし確かに燃えている。ケッチの顔からも、すでに笑みは消えていた。

「私はこの生活から抜け出したい。本当の自由と言うものを知りたい」

「何をやるってんだよ、まさかとは思いますが、脱走でも考えているのかい？」

「脱走は違法だ。それに、私たちみたいなのが外に出ようものなら、世の中がパニックになってしまう。警察や殺し屋、賞金稼ぎ達が総動員で私を狙ってくるに違いないな」

「じゃあ、どうするってんだよ」

「私に出来る最後にして最大の抵抗さ。自殺だよ」

事も無げに吐き出された言葉に、ケッチは一瞬、目を丸くした。

「自殺？」

「ああ、そういうことだ。この檻のみならず、この世界からも脱出してやろうと思っているわけさ」

哲学者のような口調で唇の端を吊り上げるデリックに、ケッチは吐き捨てるような返事を返す。

「あほくさい」

「なんとでも言うがいい。坂本竜馬を知っているか？」

「そいつは竜なのか？ それとも馬なのか？」

「そういう名前の人間を知っているか、と聞いているんだ」

「また名前の話しかよ。知らないね、生憎と俺は自分以外にはあまり興味が無いんだ」

「彼はこんなことを言っている。『世の人は、我に何とも言わば言え、我が為すことは、我のみぞ知る』とね」

「仲裁の良い言い訳にしか聞こえないんだが」

「それでもいいじゃないか。そこまで自分の行いに自信を持っている人間は世界じゃ珍しい」

「自信で飯が食えるのかい？」

「では、飯が食えればそれで良いのだろうか？」

双方から発せられた問いは、灰色の小部屋に沈黙の悪魔を呼び込んだ。

沈黙は、闇をさらに黒く染め上げる。デリックとケッチはお互いに睨み合い、様子を窺っている。空気がゼリーのように重く、粘り気のあるものに変質し、両者の言葉を遮っているようでもあった。

沈黙を破ったのは、ケッチの言葉だった。

「あんたは自分を殺すと言ったな。しかし、どうやってだ？ 剃刀も無いのに手首が切れるか？ ロープも無いのに首が括れるか？ それとも何か、自分で自分の喉でも噛み千切る気か？」

「餓死、というのも手段の一つだと、私は思っている」

「餓死だって？ 馬鹿を言うな。何もしなくたって飯は運ばれてくるじゃないか」

「ああ、だからこそなんだ。与えられるものを断るといのは、ある種、最も自由なことではないだろうか。その

結果死に至るのならば、それこそ本来の自由を手に入れたとは言えないかな」

ケッチは大きくため息をついて、「つくづくあなたの考えは理解できないよ」と呟く。

「そういうものだ、所詮、言葉というものには不完全だよ。通じていると信じることが、通信なんだ・・・」

彼らの間に再び沈黙が訪れた頃、遠くで鶏の鳴き声が発せられた。

東の空が薄っすらと光を取り戻し始め、山の頂点の辺りが火事でも起きてるように紅く染まる。鶏は出不精の太陽を責め立てるように、力の限り叫び声を上げ続けた。

「全く煩い奴らだよな、あいつらも。早起きと卵を産むことしか自慢の無い、けちなやつらだぜ。もし檻が無かったら、俺は真っ先にあいつらのところへ行って、羽を筆り、喉を食い破ってあの声を止めてやるんだがな」

「そうか、君に喉笛を噛み千切ってもらおう、というのも手段の一つだな。鶏の鳴き真似でも練習しようか」

「・・・勘弁してくれ」

「冗談だよ」

「笑えない」

ケッチが不貞腐れるようにそう言った直後、彼らの網膜に、痛みにも似た鋭い刺激が飛び込んできた。同時に目を細め顔をしかめた彼らは、次の瞬間には絶句して、石像のように全身を硬直させていた。

朝日が昇っていた。

今はまだ、その全身の僅かしか覗かせてはいないが、その美しさは彼らを打ちのめすに十分な輝きと、雄大さを持ち合わせていた。

空は、夜の断片を残しつつも朝日によって染め上げられ、不可思議で奇妙な紅の光を発していた。

「素晴らしい・・・」

息をすることすら忘れていたデリックは、惚けたようにそれだけの言葉を吐き出す。その言葉が思考の結果ではなく、反射的に口をついて出た言葉であることは、デリックに小さな衝撃を与えた。



ケッチは、鉄格子の向こう側を見つめながら、大きく息を吸い込む。

「なあ、デリックの旦那」

朝日を見つめる視線はそのままに、ケッチはデリックに語りかける。それは、ケッチの凶悪な容貌からは信じられないような、か細い声だった。

「あんまり寂しいことを言わないでくれないか？ あんたが死んだら、誰が俺の名前を呼んでくれるんだよ……」

デリックは首だけを動かして、いつもとは違う様子のケッチに目を向けた。柔らかい紅色に照らされたケッチの身体は、金色の輝きを放っている。

「確かに、俺たちは死ぬのを待つ身かもしれない。死神を相手にダンスを踊っているのは、俺だってわかっているさ。でもよ、俺たちはまだなんとか頑張ってるじゃないか。死んだら終わりだよ。こうやって話すことも、考えることも、愚痴を言うことだって出来やしない。自由なんてのはそんなにいいものなのか？ 命を賭けても奪い取るべきものなのかい？」

ケッチの声は、若干の震えが混じっ

ている。

「負け犬の遠吠えと言われてもいいさ。竜だか馬だか知らないが、そいつの言うとおり、何とでも言わせておけばいいじゃないか。『生きる』ということ以上の勝利なんて、俺は無いと思うぜ」

デリックは何も答えない。顔を伏せ、ただケッチの声に耳を傾けている。

「誰から聞いた言葉がすら忘れちゃったんだけどよ、昔、誰かがこう言っていたぜ。『何か困難にぶつかって、憂鬱を感じたときは、朝日を見ろ。答えは見つからないかもしれないが、とりあえず元気は見つかる』ってな。どうだい、ゴドフリー・デリック、探しものは見つかったか？」

デリックは小さく首を縦に動かし、「ああ」と呟いた。

「あの光を見ていたら、なんだか全てが馬鹿馬鹿しく思えてきたよ。この朝日を見て感動に打ち震えることができるのなら、私たちはもう、十分に自由だ」

そうして、彼らはお互いに顔を見合わせて、笑った。唇の端を吊り上げる

だけの、最小限の微笑みではあったが、彼らにはそれで十分だったのだ。

「なんだか急に眠たくなってきちゃった。朝食まではまだ少し時間があるな、俺は一眠りさせてもらうことにするよ」

「そうか、じゃあ、眠る前に一つだけいいかな？ 先ほど、君は負け犬の遠吠えと言われてもいい、と言ったね」

「それがどうかしたのか？」

ケッチは大きなあくびをしながら、ゆっくりと瞳を閉じる。

デリックは可笑しそうに目を細め、言った。

「残念ながら、私たちは猫科なんだよ」

日が高く昇った頃、園内に設置されたスピーカーから、放送が流れ出した。

『皆様、本日は弘前動物園にご来園いただき、誠に有難うございます』

小さな男の子は、檻の中の二頭のライオンを指差して、声を上げる。

「ねえ、お父さん、あのライオン寝てばかりで、ちっとも動かないよ。きっと夜更かししたんだね！」

大賞「ゴドフリー・デリックの憂鬱」講評

小説としての面白さ。滑らかに読ませる筆力

憂鬱を物語のテーマにしているのに作品全体が暗くなっていない。短編の作品に必要な落ちがあり、テンポの良い展開が非常に良い。読み手に最後まで主人公に対する興味を持たせる筆力と展開の良さが光る作品。

監視社会における自由の意味を、優れた描写力をもって掘り下げた寓話。思考の結果による言葉と、思考をすり抜けて思わず発せられる言葉。最後のひねりがかえって不要に思えるほどに力のこもった暗闇の中の対話劇である。タイトルから、ねずみの詩人『フレデリック』を思い出した。

文章構成がしっかりしている。興味が持続する内容であり、最後のオチが巧みである。使用言語が明解でわかりやすく、題名の付け方にもセンスが感じられる。

動物園の2頭のライオン、自由と束縛

結末（種明かし）とそれ以前の筋には飛躍がある。ライオンの会話の中に人間を想起させる内容が多すぎる。動物ではないかと思わせる工夫が必要ではないか。また、朝日・光が重要な役割を担っているように思われるが、その導入が唐突すぎる。





◆優秀賞◆

思い出せ

たつ た かず ゆき
龍 田 和 幸農学生命科学部
生物生産科学科 2年

「携帯が嫌いだ」と、彼女は言った。

とある市内のマンションの十一階二号室。それが彼女の部屋だった。

彼女は二十歳になったばかりの学生で、大学の長い夏休みを利用して入居してきた。彼女にしてみれば今年になってから二回目の引越しであったし、元々春先から一人暮らしだったので大した荷物があるわけでもなく、大学で出来た友人の手を軽く借りただけで、引越し自体は業者に頼むこともなく割合楽に進めることができたそうだ。

季節外れの引越しには、勿論理由がある。それは、一言で言えば人間関係の纏れだった。もう少し詳しく言うならば、以前交際していた男とうまく別れることができず酷い嫌がらせをされるようになってしまったから逃げた、といった感じだ。勿論、実際はそんな単純な話ではない。元々面倒くさがり屋で楽天主の彼女が、時間も手間もかかる面倒な引越しを決意したのだ。色々な要因が絡んでいることは容易く想像出来るだろう。

彼女の新しい生活に不満はなかった。

マンションの住人ともすぐに仲良くなることができた。何人かは時期のずれた引越しを疑問に思い彼女に質問することもあったが、誰も深く追求してくることはなかった。また、引越しをするついでに携帯の番号も変えたので、毎朝山ほど残っていたあの男からの留守番の伝言もいちいち削除する必要もなくなった。そしてなにより、部屋に押しかけられるといった心配がな

くなったというのは大きかった。彼女は久々に安心と開放を味わうことができたらしい。

ただ一つ。その安心も開放も、「束の間」である、ということを除けば、だが。

勿論その不満、いや不安は、夏から、引越してきた時からあったのだと思う。きっと近いうちにあの男はこの新しい部屋の住所を調べ始める。そんな確信に近い予感もあった。

そう。

彼女は、本当の意味でまだ解放されたわけではなかった。

しかし、平穏な生活を手に入れた彼女は、無意識にあの男のことを考えることから逃げていたのだろう、結局引越しをしてから二ヶ月経っても、結局彼女は何も解決策を練れずにいた。人間誰でも、嫌なことからは目を逸らしたくなるものだ。苦痛を喜ぶ人間など、まあ中にはいるかもしれないが、ほとんどいないに等しい。現実逃避。辛い現実から逃げたくなるのは、むしろ自然なことなのかもしれない。彼女も、その例外ではなかったということだ。まあ、それは彼女の性格にも勿論問題があったのだろうが。

・・・しかし、振り返って見れば。

問題を先送りにしていた時点で、彼女は、もう、手遅れだったのだろう。

秋になって、彼女に不思議な電話がかかってくるようになった。

いや、正確に言うならば、不思議な電話がかかってくる「夢」を、彼女はみるようになった、と言うべきだろう。

彼女が最初にそのおかしな夢をみた

のは、雨の音しか聞こえない、そんな静かな夜のことだった。その日、彼女は溜まっていたレポートを一気に仕上げ、夜遅くに倒れ込むようにベッドに入った。

何時、頃だろうか。新聞紙を丸めるような雨の音に混じって、微かに電子音が流れているのに彼女は気づいた。どうやら携帯が鳴っているらしい。メールだと思って最初は放っておいたが、いつまでも電子音は止まらない。どうやら電話らしい。まどろみの中で、彼女はいつまでも耳障りに鳴り続けている自分の携帯に手を伸ばした。

・・・気がつくと、彼女は朝を迎えていた。

わかることは、それは確実に夢であった、ということだけだ。夜に、携帯電話が鳴るはずはない。何せ、彼女の携帯電話は深夜零時に自動的に電源が落ちるように設定されているのだから。就寝した時間を考えると、それは夢という以外、考えられなかった。それを裏付けるように、着信履歴にはそれらしきものは何も残っていなかった。

それが夢だということはわかっている。しかし、なぜだか電話の相手が誰だったのか彼女は無性に気になった。それは、まるでさっきまで誰かと電話していたかのように携帯が開いた状態で枕元にあったから、というのもある。でも、彼女はその電話がなんだか重要なことを示しているような気がしてならなかった。・・・まあ、所詮、夢の話だ。電話の相手が誰であったとしても大した意味はないのだから、別に大して気にする必要もない。



実際、朝食を食べ終わる頃にはもう夢のことなど彼女はすっかり忘れていた。

まあ、この日は朝から珍しく不連続きだったので、夢のことなど考えている余裕などなかった、というのが本音だが。

実はやっていないレポートがあったこととか。朝食を作ろうとしたら買ったばかりの包丁が曲がっていて使い物にならなかったこととか。とりあえず目玉焼きを作ろうと思って、ベーコンを焼き始めた後に卵が切れていたことに気づいたこととか。和室の押入れが中で何か引っ掛かっているのか開かない。洗った白衣を干すのを忘れていた。エトセトラ。

とにかく、夢のことを考えている余裕なんてこの朝にはなかったのだ。

・・・きっと、毎晩同じ夢を見るようになる、なんてことがなければ、彼女はこの夢のことなど、一生思い出すことなんてなかったのだろう。

毎晩、電話は掛かってくる。

唐突に鳴り響く、夢にしては嫌にリアルで、神経に障る着信音。

最初は大きくて気にしていなかった彼女も、一週間ほどでさすがに不安になってきた。いくら夢だとは言え、毎日同じ夢を見るなんて有り得るのか、と。彼女は、「何か」を感じずにはいられなかった。

不思議と、彼女にはそれが良い電話だとは思えなかった。なんとなく絶対出てはいけないと彼女は思って、半分馬鹿らしいと思いながらも、彼女は夜、携帯を鍵付きの引き出しにしまうことにした。

しかし、確かに夜引き出しにしまったはずの携帯は、朝目覚めると必ず彼女の枕元に置いてあった。相変わらず、まさにさっきまで電話をしていたと言わんばかりに、二つ折りの携帯が開いた状態で。

彼女は、自分が夢遊病なのかと思った。彼女の部屋に何者かが侵入し、彼女を驚かせるために携帯を枕元に置いていく、という事も可能性としてはあるかもしれないが、引き出しの鍵の場所は彼女しか知らなかったはずだし、第一、危険を冒してまで彼女を驚

かせようとする理由もまるで見当がつかなかった。

着信履歴には変わらず何も残っていない。電源が自動的に落ちる設定についても何度も確認したが、おかしいところは見当たらなかったし、正常に機能もするようだった。もしかしたらと思ってアラーム機能も見てみたが、真夜中に鳴るような設定などしているはずがなかった。

それが夢であるということは、間違いなかった。そして、自分の手で携帯を枕元まで持っていく、ということも間違いなさそうだった。自分が夢遊病だと考えた方が、全て自然に思えた。

電話の夢は、定番になった。

毎晩、携帯は鳴り響く。

彼女は仄暗いまどろみの中で、決して電話に出ることはなかった。いや出ているのかもしれないが、朝目覚めた時に何かを覚えているということはない。

今夜も電話は掛かってくる。

その着信音はもう脳髄にこびりつく苦痛であり、神経を削る刃物のようだった。

日が経つにつれ、彼女の精神は追い詰められていった。

秋の終わり。

もうその電話が夢なのか現実なのか区別がつけることが出来なくなった頃。

ついにその夜、彼女は決心した。

本当に携帯が鳴るのかを、確かめるのだと。

設定通り、深夜零時に携帯の電源は落ちた。彼女は心細さを誤魔化すために部屋を隅々まで明るくして、リビングのソファで小説を読みながら携帯が鳴るのを待った。

携帯は目の前の机に置いてある。

チラチラと覗き込んでみたが、一向に鳴る気配はない。そもそも、電源が入っていないのに携帯が鳴るはずはないのだ。自分は下らないことをやっているのかもしれないと感じつつも、しかし彼女は携帯から目を離すことが出来なかった。

結局、彼女の心配をよそに携帯は朝の七時まで鳴ることはなかった。電源がオンになることも勿論なかった。

やはり、夢。間違いない、夢だ。

彼女はなんとなく安心して急に眠くなったのか、その日は大学を休んで寝ることし、ベッドに潜りこんだ。夢ならば、医者に行けばなんとかなるかもしれない、起きたら、予約を入れよう・・・、などと、穏やかな未来を描きながら。

何時頃、だろうか。

ふと、なんとなく、携帯が鳴っているような気がして、彼女は目覚めた。無断で授業を休んだので、きっと友人が心配して電話をかけてきたのだろう。彼女はゆっくりとリビングに向かった。

・・・しかし、そこに携帯はなかった。朝、机にそのまま置きっぱなしにして寝たはずだから、そこにないわけがなかった。

急に体温が下がった気がした。指先の感覚が消える。心臓の音が嫌に大きく聞こえた。微かに耳鳴りがする。

背中に嫌な汗が流れるのを感じつつ、携帯の冷たい音のする方へ彼女は足を機械的に運ぶ。

音の源は和室のようだった。

ふすまを開けて和室に入ると、丁度部屋の中心に携帯はあった。和室は昨日のまま、灯りが付いたままだった。弱々しい光だったが、もしそれがなかったら今の彼女には部屋に入ることさえも出来なかっただろう。

携帯はずっと鳴っている。恐る恐る彼女は携帯を拾い上げ、画面を覗き込んだ。しかし、暗くてよく画面が見えない。

もう一秒でも彼女は着信音は聞きたくなかったし、もし友達だったら待たせるのも悪いと思い、彼女は通話ボタンを押してから、光を求めてカーテンを開けた。

窓の向こう側は闇だった。まるで鏡のように、自分の怯えた姿がガラスに映る。

彼女は部屋を振り返った。さっきまで明るかったはずの和室は、暗かった。灯りなんて付いてなどいなかった。闇の中にある時計を見た。時計の針は暗闇のなかで深夜の三時を指していた。

突然、携帯から、女の叫び声と男の





断末魔のような声が聞こえてくる。聞きたくないのに、耳を塞いでも、声は脳髄に直接響いてくる。携帯は床に転がっているのに、まるで耳元に当てているようにそれは煩い。頭がおかしくなりそうだった。内臓を誰かに捕まれたような感覚。彼女は胃の中にあったものを全て吐き出した。それでも、吐き気は消えない。今だけ、五感が全て消えてくれることを願った。立っていることも無理だった。

いつの間にか音は止んでいた。まるで、全てが終わったかのように。すすり泣く女の声が聞こえる。彼女

自身の声だった。彼女ではない。しかしそれは彼女の声……。携帯から、流れてくる、彼女の眩き。

それで、彼女は全てを悟った。

彼女はいつの間にか落としてしまっていた携帯を恐る恐る手に取った。携帯はやはり、電源が入っていないままだった。電話が繋がっていたという形跡すら見当たらない。それもそうだ。

電話なんて、最初から。

掛かってなど、いなかったのだから。

彼女は携帯の電源をオンにして、あの男の携帯の番号を表示させた。ふ

と、包丁が頭の中に浮かんだ。あの男の腹を刺した、あの曲がってしまった包丁のことを。さっさと、捨てて、しまえば、よかった。

電話をかける。電話はすぐにコール音へと変わる。

和室の押し入れは、中で何かが引っ掛かっているのか、いつからか開かなくなった……。

静かな着信メロディが、和室の押し入れの中から、そっと、聞こえてきた。

優秀賞「思い出せ」講評

女子学生、恋愛、夢と現実の交錯、携帯電話、曲がった包丁、殺人

ミステリータッチで読者を引きつけるうまさがある。臨場感溢れ、また鬼気迫る情景描写に魅了される。最初に導入された曲がった包丁・和室の押し入れが開かない等に重要な役割を担う等、筋が綿密に計算されている。結末（種明かし）への導入がスムーズに展開されている。

小説としての面白さ。最後まで引き付ける筆力あり。

現代を象徴する「携帯電話」を使った作品で、推理小説風にまとめている点は、他の作品とは趣向が違って面白みを感じた。

ただ、「彼女」を主人公にした第三者的な視点からの文体は、やや不自然。ことばの使い方が多少安易。

伏線を敷きつつ最後のクライマックスに至る構成はしっかりしているが、現実無視のきらいが引っかかる。夜、電源が落ちているのに鳴る携帯、臭わない死体等の問題を解決し、トリックとヒューマンな要素をまぶせばおもしろかった。

マイナスの感情表現の心理劇。恐怖とマイナスの読後感。



◆優秀賞◆

雪 御 伽

ふく ち かおり
福 地 香

医学部
保健学科 2年

ふと気づくと、雪が降り出していた。そして、隣には少年がいた。その二つを同列に並べても違和感がないほどに、余りに自然に彼はそこにいた。

「ここでなにしてるの」
子供は視線を彼方に投げだして、足をぶらぶらさせながら尋ねてきた。ベンチに座った彼の足は地面に届かない

からそれができる。それほどに、少年は幼い。
「ねえ、なにしてるのってば」
答えが得られないことに口を尖らせ



て、ちらりと子供はこちらを見た。何の気負いもなく声をかけてくるから知り合いかと思っただが、あどけないその顔に見覚えはなかった。白い膚が、印象的でもあってけれどこの雪景色の中では保護色のようにもあった。

「僕をムシする気？ 別にいいけど。じゃあもう声かけないからね？ いいんでしょ」

拗ねて頬を軽く膨らまして、子供はまた視線を投げだした。先には、冬枯れの木立しか見えない。

「何…見てるの？」

声を出してみても初めて、声の出方を思い出した気がした。自分はいつか喋っていなかったのだろう。声も、自分のものだという実感がなかった。

「人のシツモンに答えなくて、自分がシツモンするの？ それって、オトナとしてどうなの？」

生意気な子供だった。

幼さに合わぬ口の達者さに、呆気に取られる。しかも、正論だ。

「…私は…」

自分が何をしているのか、答えようとして、出来なかった。自分で、自分が何をしているのかわからなかった。

いや、そもそも、ここにいることがおかしいのだ。いるはずのない人間。それが自分であるはずだ。

「あ、わかんないんだ。なにしてんのか。わかんないならわかんないって言えばいいじゃん。なんでなんも言わないの？」

「……わからないわ」

前の質問に対する答えなのか、今の質問に対する答えなのか、自分でもよくわからない奇妙な返答になってしまった。

けれど子供はその答えで満足したらしい。ふうん、と口を尖らせて、こくこくと頷いた。

「ボクはねえ、雪を見てんの。雪、キレイだから」

「雪…」

子供に倣って、視線を飛ばしてみる。白い柔らかな固体が、音もなく落ちてくる。無数の、無限の白。その帳に遮られるように、木立は臆にしか見えない。

「なに見てんの」

「君と一緒に。雪よ」

どこかぼんやりと答えた。すると子供は、うそつき、と呟いた。

「嘘？」

驚いて隣に視線を移す。子供は、こちらに視線はくれなかった。

「うそつきじゃん。雪なんか見てないくせに」

「見てたわよ」

「見てないよ。どうせ、木とか見てたんでしょ。いっつもそうだよ。先ばっか見て、先ばっか気にして、近くにあるもの全部ムシ。こんなにキレイなのに」

ごくり、と息を呑んだ。

確かにそうだった。自分が今眼を奪われていたのは、臆な木立。雪、そのものではなかった。こちらを見透かしたような言葉。

「…君、誰？」

今更の質問だ、と思いはしたが、今になって初めてその重要性を感じた。

「ボク？ あなたが一番よく知ってるはずだよ」

「でも私、君に逢ったことないわ」

「うん、そうだね」

子供の言葉は、矛盾していた。

「ああ、セカイが重くなっていくね」

「え？」

突然話題を変えられて、一瞬、ついていけなかった。

「重くなってるとでしょ。雪で」

そう言われて、今まさに地面に降り積もろうとする雪々を見た。確かに、地球の質量は増している。けれど、そんなのは微々たる変化でしかない。重くなった、と考えていいのだろうか。

「またつまんないこと考えてるんでしょ」

子供は、露骨に厭うような顔をした。

「変わってるよセカイは。ジカンがたつから、かならず変わる。でもね、どんなに変わってもセカイはセカイじゃないんだ」

その言葉に、全身が強張った。

どうして。

どうしてこう、この子供は心の奥を見透かす。抜けない棘を、凝った最奥を、こうもあっさりと。

ならば、この子供ならわかるだろうか。この子供になら、ぶつけてみても

いいだろうか。

「……ねえ…生きるって、生きてる実感って、………どうやってわかると思う？」

声が震えた。身体の芯も、震えていただろう。全身で、泣いてしまいそうだ。

そのとき脳裏によぎったのは、一人の男の死だった。

初めて愛した男だった。初めて愛してくれた男だった。

彼の隣にいられるなら、何だってした。身寄りのない私に、ありったけの愛を注いでくれた彼は、生きる希望だった。笑顔とは、自然にこぼれてくるものだ。彼に出会って初めて知った。

けれど彼は呆気なく逝ってしまった。

死んだ彼を見つめてみると、この世には確かに魂と呼ばれるものがあると感じた。あってほしいと感じた。つい先程まで、「生きて」いた彼の身体は、確かに今抜け殻だった。生きていた彼と、抜け殻の彼を同じと思えなかった。魂という形で、隔てて欲しかった。そうでなければ、生も死も同じだった。

生きるとは何だろうと思いはじめた。生きて私はどうなるだろう。死ぬだけだ。彼が死んでからも私は生きてきた。変わったところといえば、髪が伸び、爪が伸び、身体は勝手に代謝を続けていて、生命の炎を燃やしている。それだけだ。変化もなく、燃やすだけ。それを、長く続けることに何の意味があるだろうか。

そもそも、これが夢でない証拠がどこにある。もしくは、世界中の人が私を騙していないという証拠がどこにある。終わらない夢は現実でしかないし、真実を語るものがない嘘は紛れもない真実だ。

生きるとは何だ。生きているとは、どうやってわかるのだ。自分が生きている証拠が、どこにある。

「だから、死のうとしたんだね。死ぬことで、生きているって確かめるために」



突然、涙が溢れた。胎の底から、何か熱い塊がせり上がってくる。咽びとなって吐き出されたそれは、もしかしたら自分の魂の欠片なのかもしれない。

そうだ。私は確かめたかった。自分が生きているということ。魂の存在を。

「そうして迷ったんだ。魂が消えたということ、誰が確かめるのか。確かめられるのは自分以外にいないということに気づいたんだ。…それが、あなたがここにいる理由だね」

迷って、迷って、ここで。何をすることもなく、何を出来ることもなく。幾万の雪の欠片の中で、漂うように、たゆたうように、ただただここで。

穏やかな声音が、囁きのように降り注ぐ。

「生きてみるといいよ。終わらない夢は、確かに現実だよ。嘘が、真実かもしれない。けれど、生きてみるといいよ。そうして誰かと関わっ

て。魂の存在を、信じてみるといい」

呆然とした。

子供は、いつの間にか立ち上がり、手を差し伸べていた。いいや、もう、彼は子供ではなかった。

「…あ…なた」

「魂の存在を信じてくれるなら、僕のこと信じて。魂となった、僕を信じて。辛いときは、泣いていい。悲しいときは、恨んでくれていい。そうして、生きてみて。肩の力を抜いて、先ばかり見据えずに、たまには近くのものに眼を囚われて。世界はきっと、そんなに悪いものじゃない」

新たな涙が、溢れ出した。熱い、熱いその雫は、けして不快なものではなかった。喉が詰まって声が出なかったから、想いが全部伝わることを祈って何度も何度も願った。

彼の顔の前に、雪が降っていた。一つずつ異なるその繊細な結晶は、涙で滲んで脆く儂く、けれども確か

にそこにあった。

「ああ…ほんとう。綺麗ね、雪」

そう告げたときなぜかふわりと、強張っていたはずの顔が緩んだ。

ふと、眼を開けると、そこは白い天井だった。頬を掠める風は、若葉の萌える匂いがした。風は、人の声をもさざめきとして運んでくる。

ふっ、とあの子供の笑い声がした。

思わず身体を動かそうとして、自分の手が、腹をしっかりと抱えていることに気づいて、眼を見開く。

その瞬間、すべてを悟った気がした。

目尻から、雪の雫が頬を伝い降りていった。

優秀賞「雪御伽」講評

短編の作品として上手く纏めている。爽やかさと不思議さを残す読後感。テンポの良さ。落ちも効果的である。

「勝手に代謝を続けて」いるだけの生に、もはや耐えることのできない「私」は、「子供」を通じて、死ぬことで確認する生ではなく、生きて他者と関わることで実感する生を選択する。「子供」がやがて死別した「彼」となり、最後に胎内に宿った二人の生の証となるくだりは圧巻である。

内容には引き込まれるものがなかったが、起承転結の確かさ。

冒頭と最後のフレーズはとても好印象。登場人物の必然性（子どもと彼女と愛した男）に説得力が欠ける。話の展開もわかりにくい。

「雪御伽」という題名は、言語感が綺麗で興味がそそられる。

子供と大人、夢、恋愛、子供の化身としての彼の魂、死

行間、文と文とのつながりを理解するのが難しい箇所がある。「心の奥を見透かす」との記述があるが、この導入がきわめて唐突な感じがする。言葉足らずの箇所では行間を埋める工夫が必要ではないか。最後に「すべてを悟った気がした。」とあるが、何を悟ったのか、わからない。



Ⅶ けいじばんコーナー

平成17年度 弘前大学学生表彰一覧

平成17年度の弘前大学学生表彰授与式が、平成18年2月23日（木）10時から事務局3階大会議室で執り行われ、遠藤学長から表彰状及び記念品が贈呈されました。
表彰された団体・個人は次のとおりです。



【団体】

被表彰団体	主 な 功 績
弓道部（女子）	第35回東北地区秋季女子学生弓道大会Ⅰ部リーグ戦優勝 第45回東北地区秋季女子学生弓道大会優勝 第29回全日本学生弓道女子王座決定戦準優勝
競技ダンス部	第70回全東北学生競技ダンス選手権大会団体戦ワルツ第1位 NPO法人日本プロフェッショナルダンス競技連盟日本競技ダンス選手権大会アマ・選手権ラテン・アメリカン第3位
医学部空手道部	第48回東日本医科学生総合体育大会空手道競技男子総合優勝 男子団体形競技優勝 男子団体組手競技準優勝 第48回東日本医科学生総合体育大会空手道競技 女子団体組手第3位
空手道部	第4回東北大学空手道選手権大会男子団体組手第2位 第56回東北地区大学総合体育大会男子団体組手第2位
混声合唱団	第58回全日本合唱コンクール東北支部大会大学A部門金賞
ロボティクス研究会	100チーム近い参加大学の中から予選を突破しNHK 大学ロボコン2005全国大会に出場し、特別賞を受賞した。大会の様子は全国放送や新聞で紹介され、大学の知名度を高めた。
ひまわりサークル	結成10年目を迎え、活動の場が病院から地域へ、対象者も小児から高齢者・障害者へと拡大し、様々のボランティア活動を通し社会に貢献している。

【個人】

被表彰学生	学部・研究科名	主 な 功 績
島村礼央奈	人文学部	第35回東北地区秋季女子学生弓道大会Ⅰ部リーグ戦優勝
菊池直紀	人文学部	第45回東北地区秋季学生弓道大会Ⅱ部リーグ戦優勝
菅原康祐	教育学部	北東北大学野球連盟2005年秋季リーグ戦（2部） ベストナイン賞（外野手）受賞
小渡亮介	医学部	第27回全国国公立大学空手道選手権大会男子個人形優勝 第48回東日本医科学生総合体育大会空手道競技部門 男子個人形優勝 第56回東北地区大学総合体育大会空手道競技部門 男子個人形第1位
佐々木英嗣	医学部	第48回東日本医科学生総合体育大会柔道個人競技 無差別級優勝
川野雄一朗	医学部	48回東日本医科学生総合体育大会バドミントン競技 男子シングルス第3位 第35回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 男子ダブルス優勝
田中孝幸	医学部	第35回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 男子ダブルス優勝
藤田沙耶花	医学部	東北総合体育大会ソフトボール成年女子の部で青森県チームの選手として出場し、優勝
山本李奈	人文学部	第4回女性と仕事の未来館作文募集で最優秀賞にあたる「女性と仕事の未来館館長賞」を受賞
古川奈津子	教育学部	第20回全国スポーツ・レクリエーション祭「スポレクあおもり2007」マスコットデザイン全国応募で、優秀賞を受賞
赤岡亮	理工学研究科	平成17年度電気関係学会東北支部連合大会において発表した論文がIEEE SENDAI SECTION から評価され、Student Award The Best Paper Prizeを受賞
近藤潤	医学部	英文論文を国際的専門誌 International Journal of Molecular Medicine に公表

問合せ先：学務部学生課学生生活支援グループ 内線3113

平成18年度 学生ボランティア活動助成

平成18年度学生ボランティア活動助成の募集について6件の申請があり、下記の団体が承認されました。選考結果の通知は平成18年6月9日(金)に遠藤学長から事務局特別会議室において交付されました。



団体名	申請代表者
児童文化研究部 (KIDS')	渡邊 美里 (教育学部)
へき地教育研究会	福士 貴人 (教育学部)
さくらボランティア	大山 祐太 (教育学部)
ひまわりサークル	石崎 佑実 (医学部保健学科)
SaBoTen (サボテン)	山田 哲也 (人文学部)
環境サークルわどわ	福田 豊 (理工学部)



第57回 東北地区大学総合体育大会開催

第57回東北地区大学総合体育大会は、東北地区49の大学・短大から約6,500名の選手を集め、弘前大学が主管して、弘前市を中心に4市1町の体育施設において開催された。

前半はソフトテニスなど4競技が6月16日から6月19日まで行われ、後半は陸上競技など13競技が6月22日から7月3日まで行われた。

全期間を通じておおむね好天に恵まれ、各競技場で熱戦が繰り広げられた。

弘前大学 主な結果

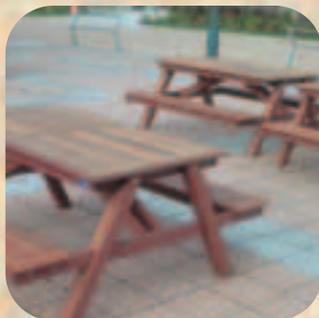
種目	男・女	順位
準硬式野球	男子	3位
バスケットボール	女子	3位
バレーボール	男子	3位
	女子	3位
剣道	男子	優勝
空手	男子	準優勝
	女子	3位

編集後記

「学園だより」第1号は、今から42年前、東京オリンピック開幕直前の1964年10月1日に4頁の装いで発行されました。その内容は佐藤熙学長の「大学の現況と計画」、教育学部・医学部・農学部及び学生部の各部長のことは等からなっています。「学園だより」刊行の目的としては、「厚生補導学内の諸事象を報告し、教育目的達成の一助とするために・・・」と記され、配付範囲は「学内だけに限らないで、学外の高校などに及ぼす・・・」と書かれています(引用は中村勉医学部長の「創刊のことは」より)。

「学園だより」は本号で152号に達し、151号では30頁を超えるまでに厚くなりましたが、配付範囲は逆に縮小されて学内に限定されています。2003年9月に創刊された「弘前大学広報誌 ひろだい」は、このように情報が届かなくなった学外へ積極的に情報を発信するために刊行されていると考えられます。16頁しかありませんが、写真や図が多く読みやすい内容になっています。発行部数は「学園だより」の6倍の12,000部で、学生の保護者や青森県内の県市町村庁、教育施設、高等学校、金融機関、郵便局、道の駅等に配布されています。

「学園だより」の愛読者は残念ながら多いとはいえません。「弘前大学広報誌 ひろだい」とも協力しながら、大学内外の皆さんに読んでもらえるような「学園だより」を目指して、これから少しずつ改善してゆこうと編集委員会は考えています。今号では体裁を変えてみました。ご意見・ご要望等ありましたら、編集委員へお寄せください。(氏家 記)



弘前大学 学園だより Vol. 152
2006年8月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

弘前大学
「学園だより」編集委員会
委員長
氏家良博(教育・学生委員会)
委員
渡辺麻里子(人文学部)
太田誠耕(教育学部)
松谷秀哉(医学部医学科)
稲葉孝志(医学部保健学科)
遠田義晴(理工学部)
浅田武典(農学生命科学部)
笹森利通(学生課)
石岡勝彦(学生課)